

萬葉浪漫
家持能登巡行追体験之旅
リハーサル資料

* 序 *

名も知らぬ花…。そびえたつ岩…。神やどる森…。

天平20年(748)の春。大伴家持が、越中国守となって2度目の春。
春の出拳すいこをかねて、はじめて越中国内8郡を巡行することになった。

家持は、それぞれの土地で、新鮮な風物に接し、大いに創作意欲を刺激され、多くのすぐれた作品を残している。

家持は、巡行の旅で何を見、何に触れたのだろうか。

我々も1200年の時を越えて、家持の感動を追体験してみよう。



* 出発 *

越中国庁跡に建つと言われる勝興寺は、門が東を向いています。

越中国庁は、南を向いて建てられていました。

家持が出入りした国庁の正門は、現在の御亭角おちんかど廢寺跡の方に向かって開かれていたことでしょう。

そこから出発した家持は、どの道を通って、氷見方面へ向かったのでしょうか。ちょっと想像してみてください。

* 雨晴 *

馬な並めて いざうち行かな
渋しぶたに谿の 清き磯みに 寄する波見に

(卷十七・3954)

雨晴トンネルを抜けると、女岩^{めいわ}が見えてきます。ここに「つまま公園」があり、高岡市内でもっとも古く、富山県内でも2番目の古さを持つ万葉歌碑が建っています。この公園の横を流れるのが「渋谷川」です。

家持は、部下たちに、馬を並べてさぁ行こうと誘っています。

雨晴トンネルができる以前は、山の上の道を使っていました。

家持がいた頃は、砂浜がもっと沖合まで広がっていたと考えられています。

天気の良い日は、砂浜を歩いて行ったのでしょうか。

* 氷見砂丘 *

渋谿^{つぐよ}を 指して我が行く この浜に
月夜飽きてむ 馬しまし止め

(巻十九・4206)

雨晴トンネルを抜けると、高岡市太田です。太田は氷見市との境になります。太田小学校の正門横には、この歌を刻んだ歌碑とともにかわいい家持像が立っています。この歌は、布勢水海で一日遊んだ帰り道での作です。四月十二日の歌ですから、満月にほど近い月が浮かんでいたのでしょうか。

* 長浜の浦 *

珠洲^{すず}の海に 朝開き^{あさびら}して 漕ぎ来れば^こ
長浜の浦に 月照りにけり

(巻十七・4029)

目的地国府の港に近づいた。しかし到着を前にして夜となり月が海上を照らすようになった。もちろん身は疲れていたはず。だが、任を終えて心は軽かったであろう。折しも長浜の浦に月がこうこうと照っている。一行の壮挙を祝するがごとく明るい。われ今まさに任を終えんとす。疲れの中にも身を包む安堵と感慨が「長浜の浦に月照りにけり」なのであろう。(伊藤博『万葉集釈注』より)

家持の巡行は、能登半島の珠洲郡で終わります。

そこから、船で一気に国府を目指して帰りました。到着したのは「長浜」でした。現在も、長い砂浜が伸びる雨晴海岸には、4つの海水浴場があります。高岡側から、雨晴海水浴場・松太枝浜海水浴場・島尾海水浴場・松田江浜海水浴場と名前が変わるのです。家持がたどりついた「長浜の浦」は、どこなのでしょうか。

* 布勢水海 *

もののふの 八十伴^{やそとも}の緒^をの 思ふどち 心遣らむと
馬並めて うちくちぶりの 白波の 荒磯に寄する
洪谿の 崎たもとほり 麻都太要の 長浜過ぎて...
布勢の海に 舟浮け据ゑて 沖辺漕ぎ 辺に漕ぎ見れば
渚には あぢ群騒き 島廻には 木末花咲き...

(巻十七・3991)

家持がもっとも愛した越中の風景は、布勢の水海です。万葉集には、4度も布勢の水海の歌が出てきます。

部下とともに遊びに出かけるばかりでなく、都からの客人をもてなして訪れています。

家持は、布勢の水海に船を浮かべ、藤の花やホトトギスを愛でました。

* 駒つなぎ桜 *

ここまで馬でやって来た家持は、この桜に馬をつなぎ、徒歩で山を越えたと伝えられています。

なぜ家持は、ここから志雄・羽咋を目指したのでしょうか。

答えは、当時の道路事情にあります。

日本中に国道が敷設されたとき、能登半島は越前国に属していました。そのため、越前国府から羽咋や七尾に向かう道は整備されましたが、羽咋や七尾と越中を結ぶ国道は整備されませんでした。

ところが、家持が越中国守となった時は、能登半島は越前国から分離されて、越中国となっていたのです。そのため、国道で能登半島へ出ようとすれば、俱利伽羅峠を越えるという遠回りをしなければならないのです。

そこで、家持は、国道ではなく地元の人々が使っている道を通して、志雄・羽咋方面へ抜けたのです。

いったん志雄に出てしまえば、能登半島の先端まで国道が通じていました。

* 伝小窪廃寺 *

五日の平坦に道に上る。よりて、国司の次官以下の諸僚皆共に見送る、時に、射水の郡の大領安努君広島が門前の林中に予め饞饌の宴を設く。



玉ほこの 道に出で立ち 行く我れは
君が事跡を 負ひてし行かむ

(巻十九・4251)

安努は和名抄、射水郡阿努とある地で、今の氷見郡加納村の辺といふ。かの地方にその住宅があつたか。然らば国府を発して海岸つたひに氷見に出で、左に折れて志平方面に出る、北陸の本道を通つたのである(鴻巣盛広『万葉集全釈』より)

* 志浦川 *

平成17年3月に、志雄町と押水町が合併して、宝達志水町になりました。この町を流れるのは「志浦川」です。どうして「志浦」をシオと読むのでしょうか。

志平路から 直越え来れば
羽咋の海 朝なぎしたり 船楫もがも

(巻十七・4025)

この歌の題詞には「気太神宮に赴き参り、海辺に行く時に作る」とあります。

題詞に「海辺に行く時に作る歌」とあるけれども、歌柄は、志雄道の峠に立って外海を見納めた時の感慨のように見える。「直越え来れば」というような歌い方をする集中の歌は、皆そういう折の感慨である。海辺に行く時に作っても、思いは、さっきの峠の上に立った時点に立ち返っているのであろう。

(伊藤博『万葉集釈注』より)